

サラブレッドで学んだ繁殖学

本好 茂一[✉]

帝京科学大学生命環境学部アニマルサイエンス学科

(平成21年2月16日受理)

Study of Reproduction Learned through Thoroughbred

Shigekatsu MOTOYOSHI

University of Tokyo opened its own farm one year before I finished my three-year research in the field of livestock surgery. And I was assigned, as the status of a research student, to look after the livestock in the new farm. As a veterinarian, I was also expected to extend support for reproduction of foreign-based brown haired wagyu via artificial insemination.

The farm's budget was fixed as 70% of the income earned in the previous year. Obviously there was no budget to purchase thoroughbred at this farm. So I proposed a barter deal of giving Arab horse belonging to our farm and receiving a 23-year-old thoroughbred that had a record of two miscarriages in the Goryo Farm. Despite great concerns, the thoroughbred gave birth to a filly in March 2nd, 1964. The same year, we received another imported mare that had jaundice, and got a foal. Subsequently, we got a mare which was not pregnant for nine years from a private farm. Sure enough that was another successful case of giving birth to a foal. Some of these foals ended up participating in thoroughbred stakes like Oka-Sho, Satsuki-Sho and Derby races.

Positive administration of hormones was the key to the success. However, none of those hormones are sold today due to various potential dangers. The field of reproduction learned through such experience still remains as part of my treasure.

3年間の研究生生活を家畜外科教室で終えた。その前の年の秋、東京大学付属牧場が新設され、研究生の身分のまま牧場へ移籍することになった。私にとって人生初の獣医学会の発表が4月末にあった。演題は“犬のStreptotrichoseの1例”そしてやっと5月1日東大所有の1941年製いすゞトラックで、牧場に運ぶ肥料の荷物の片隅に当時の柳行李と木箱につめた本を便乗されて貰い、東大農学部を早朝出発した。途中、牛久沼のほとりで運転手さん持参のおにぎりを齧ったことがなつかしく思い出される。一服してから目的地、岩間町(当時南川根村)へ向かった。牧場の近くの石岡の手前で工事中の道路にかかった。不安はあったが、大丈夫と判断し進入した。地盤がゆるくなっており車輪は空回り、すっぽり泥の中にめり込んでしまった。前にも進めず後にも退けず結局積荷を下ろしてやっと元のところにもどったが、荷物を再び積むのにすっかり疲れきって、予定より

大幅に遅れてしまった。牧場職員のプーイングの中で積荷は倉庫におさめられた。こんな第一歩、牧場生活の前途の多難さが予測された。

そこでの生活は飼育されている馬、牛、豚、羊、鶏と多彩で、老齢の牛、乳牛不足で黒毛和牛の雑種(新乳牛)もいて乳牛扱いをうけていた。豚は牧場の収入源ともなっていて、中ヨークシャーとパークシャー種が中心で、後にランドレース、ハンプシャー種も加わった。これらの家畜の衛生管理が私の仕事であった。朝8時始業、夕刻5時が終業であるが、病気の発症は時間内でなく夜間や早朝が少なくない。また外来の褐毛和牛への人工授精のサービス事業が獣医師の業務であり、農繁期になると早朝からたたき起こされてしまう。また馬の種付けに馬運車がなく、発情期の種付けには千葉や栃木の牧場まで乗用車で行き、種牡馬のいる牧場をお願いして採取した精液を鳩で輸送し、人工授精を行う研究も行われていた。

さて、牧場予算は前年収入の70%が前提となっ
うお役所仕事であった。馬はアラブ、アングロア
ラブと手間は同じでも低価格でセリ市で思惑より
安価でも売らざるを得なかった。場長はわが国始
めての馬学講座教授となられた方であったが、一
日も早くサラブレッドへの転進をお願いしたが、
君達の技術でサラブレッドは扱えないと怒鳴られ
た。これには裏があり、馬を導入する予算がとれ
ないからであったらしい。自力導入には安く手
に入れる必要があった。当時最高レベルの下総御料
牧場に国立同志の相互利益になる一つの提案を行
った。御料牧場に必要アラブ馬が東大牧場に
いて、御料牧場には老齢(23歳)で最近2回の流産
をした名血馬がいた。この交換には大いなる不安、
それは、無事に分娩ができるか否かである。何れ
の上司からも理解が得られたが、もう一つの不安
として老齢に多発する息労(肺繊維化)があった。
しかしその何れもクリアーして導入馬は見事に雌
馬を産んでくれたのだ(1964年3月2日)。その
年に更に溶血性黄疸を発症する輸入雌馬も無償で

ていた。子豚販売、牛乳・鶏卵などの払下げとい
払下げをうけ、これは新生子馬に母乳を吸乳させ
ないことで防ぐことが出来た。次に民間牧場から
9年間の不受胎馬も貰い受け見事に排卵に成功し、
受胎、翌年初子が出産された。

更に初生児黄疸の経歴をもつ母馬も御料牧場か
ら移譲され、これも無事成功した。また、未勝利
の現役馬で友人の医師所有の馬を貰い受けた。最
初の老齢名馬から四代目に皐月賞出走馬が、また
溶血性黄疸の子馬は桜花賞に出走、医師から譲り
受けた未勝利馬の子馬は皐月賞、ダービーに出走
した。

これらの裏には受胎の前提となる合成黄体ホル
モンの積極的導入、豚下垂体からの抽出された
FSHの応用などが妊娠維持や、排卵の推進に成功
した。何れのホルモン剤も今は、市販されていな
い。豚や羊の口蹄疫発症から抽出は中止となり、
合成黄体ホルモンは人で奇形児の関連が疑われ生
産が中止された。

馬に学んだ繁殖学は私の財産の一つである。